

西加茂郡・東加茂郡及びその周辺 地域における語の伝播について

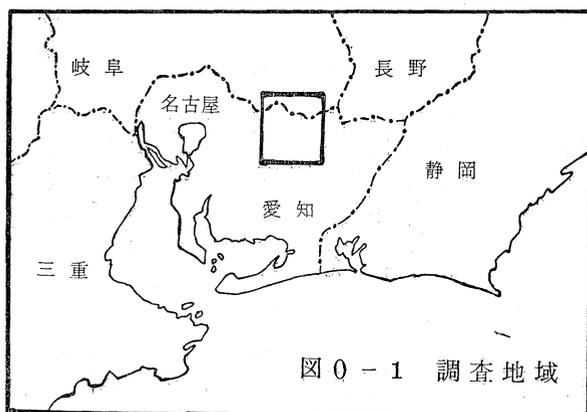
—「前庭」「馬鈴薯」「まぶしい」—

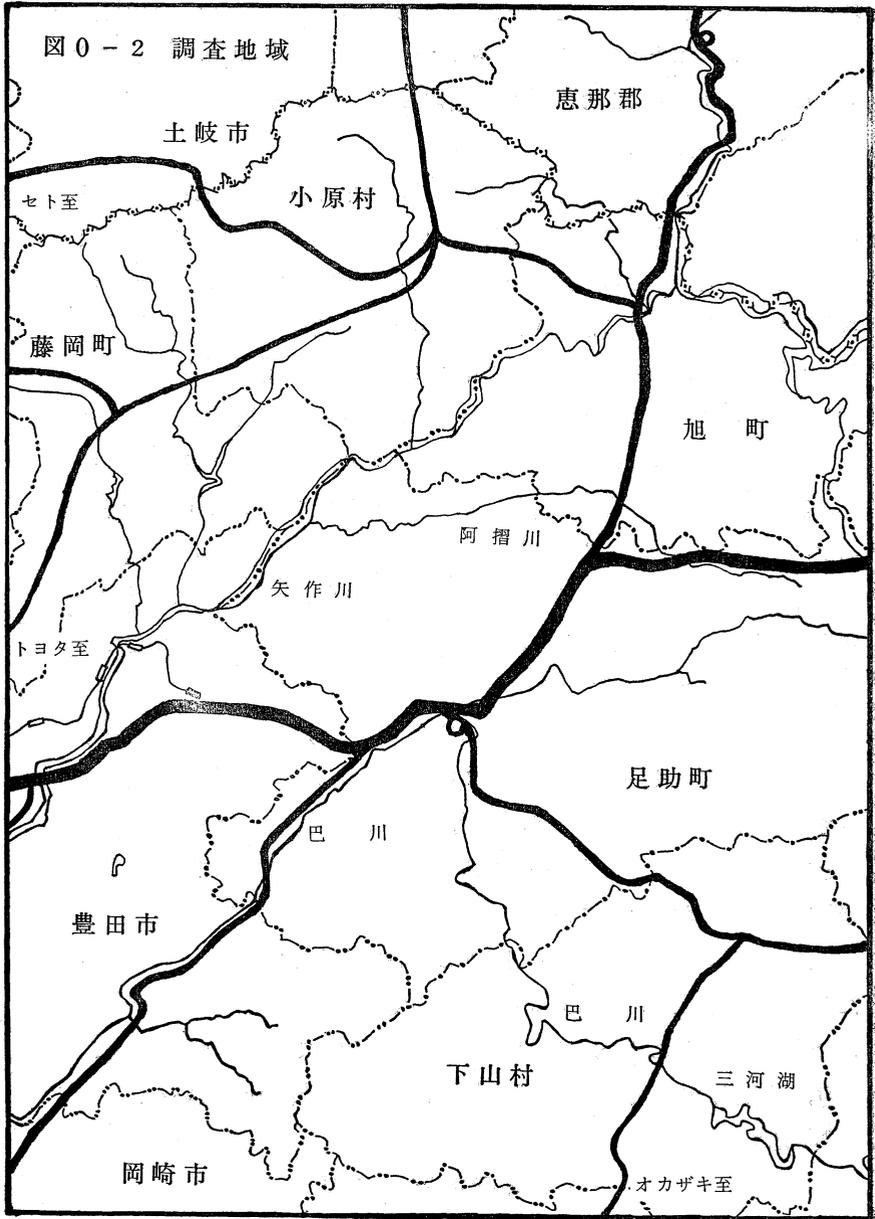
太田 有多子

本稿の資料となる愛知県西加茂郡・東加茂郡及びその周辺地域での調査は、昭和57年春から昭和58年夏にかけて行ったものである。

一. はじめに

西加茂郡・東加茂郡は尾張と三河の境に位置し、北は東濃地方と呼ばれる岐阜県土岐市、瑞浪市、恵那郡に接している。また、当該地域は名古屋市の中心からほぼ30キロ東にあり、^{まなけ}猿投山を境に名古屋近郊とはいえ、山の多い地域である。(図0-1)





調査地域には西加茂郡^{ふじおか}藤岡町、小原村^{おぼら}、東加茂郡^{あすけ}足助町、旭町^{あさひ}、下山村^{しもやま}、さらに隣接の豊田市東部をも含む。そして、そこには矢作川^{やばき}、阿摺川^{あずり}、巴川^{ともえ}が山間を縫って流れており、中でも矢作川はほぼ西加茂郡と東加茂郡との境を成している。(図0-2)

山間部がほとんどを占める当該地域では、集落といっても人家がかなりの距離をもって散在しているところが多い。ただ、調査地域内の中央を東西に延びている国道153号線沿いには今も古い歴史の面影を残す足助の町並みを見ることができる。国道153号線はかつて「伊那街道」と呼ばれ、近世より矢作川、巴川の水運とともに中馬による馬の背輸送が発達し、明治44年に国鉄中央線が名古屋―春日井―多治見―長野へと全線開通するまでは、信州飯田から下伊那の^{ねば}根羽を経て足助に入り、名古屋に至る主要な中馬街道であった。⁽¹⁾ 調査地域内を通る中馬街道として他には、「伊那街道」の足助の町の西の入口近くに岡崎に至る「七里街道(別名足助街道)」が、さらに足助の町の東の入口近くに岐阜県恵那郡明智、岩村に通じる「美濃街道」が分岐している。そして、足助の町は東加茂郡において、中馬の宿場の要素に加えて、商業の中心地的性格の強い町として発達した。

西加茂郡藤岡町、小原村及び豊田市は江戸期から、豊田に市制が施行された昭和34年までは一つに統括されていた。豊田市の中心地は調査地域よりさらに南西に位置しているが、最近、急速に発達したこの豊田も昔は^{ころも}拳母といひ、小規模な集散地の一つであった。藤岡町、小原村では陶磁器の原料となる石粉が採れることもあって、窯業の中心地である瀬戸や隣接の多治見市や土岐市など窯業を主産業としている地域との行き来が盛んだったようである。現在、西加茂郡・東加茂郡では藤岡町が豊田、名古屋、瀬戸の通勤圏に入るためか、唯一ここで住宅が増加している以外、足助町、旭町、下山村、小原村では過疎化が進み、深刻な問題となっている。

調査地点数は、

小原村	10地点
東加茂郡足助町	18地点
旭 町	12地点
下山村	12地点
豊田市	13地点
岐阜県土岐市	1地点
恵那郡明智町	1地点
串原村	3地点
計	83地点

被調査者の条件は、それぞれの地点で生まれ育った生え抜きの明治生まれであること、両親もしくは片親も同地点生まれであること、他地での在住歴が5年以内であることとしたが、実際には大正生まれを5地点含む。性別は可能な限り男性としたものの、男性70地点、女性13地点となった。

調査方法は、なぞなぞ式質問法（『日本語地図』の質問文を参考）をもって語彙52項目について面接調査を行う。さらに、予備調査から得た語形を示すことによって理解語をも調査した。現在、すでにこの地域の老年層でも共通語化している項目は多く、そのため被調査者には可能な限り幼年期から使用している、または使用した語形を回答してもらったというのが実状である。本稿の「二. 当該地域の語の分布相」以降の本文及び分布図1-2, 2-2 で用いる「使用語」「理解語中使用語」「理解語中理解語」については、被調査者がもっともよく使用する語形、もしくは使用した語形を「使用語」とし、被調査者自身が時々使用すると回答した語形を「理解語中使用語」とし、被調査者の家族または同集落生まれの在住者が使用すると回答した語形を「理解語中理解語」とした。ただし、「理解語」には被調査者が他の土地で知り得た語形、または他の土地の語形であると認識している語形は含まない。

二. 当該地域の語の分布相

西加茂郡・東加茂郡及びその周辺地域での調査は尾張と三河の境に位置する地域の語の分布相を調べる一環として行っているものであるが、当該地域は前述通り、村といっても人家が散在しており、それがかえって隣村との交流を自由にしているのか、少なくとも語彙においては各項目とも変種は少なく、分布も単純なものが多かった。足助の町は物資の流通において、名古屋または岡崎から飯田へ至る間の主要な一宿場町であると同時に、文化流通の中継地でもあった。文化は主に岡崎から足助の町に向けて流れ、足助周辺の集落は足助の町からそれを吸収していったのであろう。(2) 同様に語彙においても、二語形が南北にそれぞれ分布している場合、北に分布する語形に対して、南に分布する語形、つまり岡崎方面の影響を受けたと考えられる語形には勢力があり、明らかに侵入語形と考えられるものが圧倒的に多い。さらに、わずかではあるが、当該地域より西の、つまり尾張地区を含む、もしくはその地区の影響のみられる地域からの侵入と考えられる語形を持つ分布図もある。

本稿では、以上のような当該地域における語の伝播の特徴を見るために、「前庭」図1、「馬鈴薯(じゃがいも)」図2、「まぶしい」図3を取り上げる。

前庭

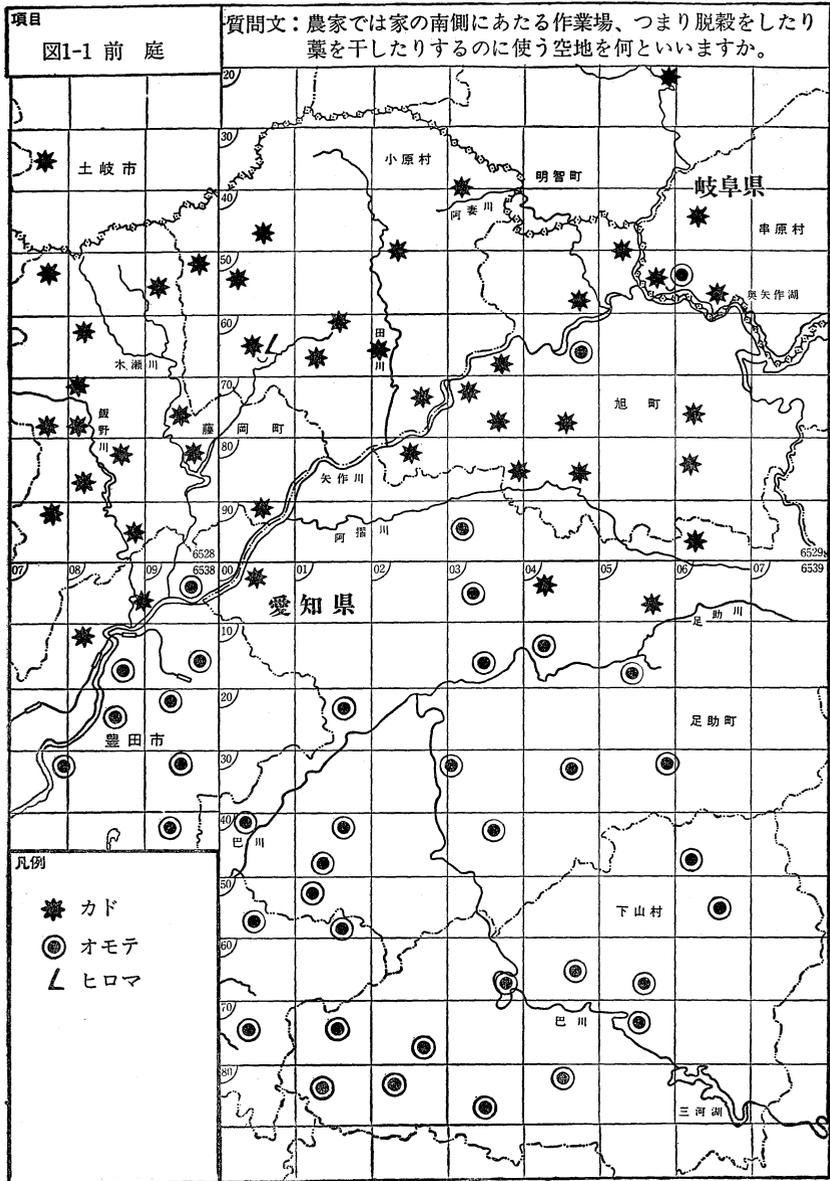
図1-1は質問文「農家では家の南側にある作業場、つまり脱穀をしたり、藁を干したりするのに使う空を何といいますか。」から得た使用語の分布図である。

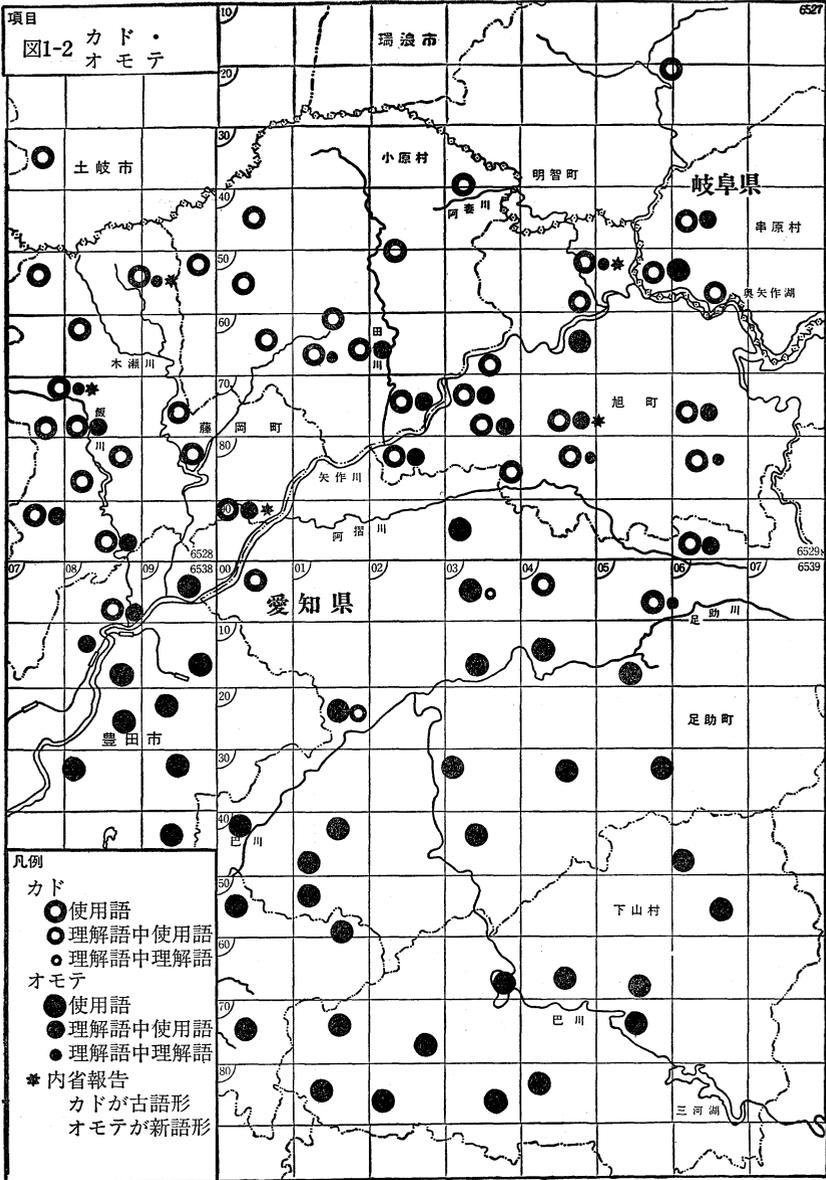
矢作川以北及び旭町にカド、矢作川以南の豊田市、足助町、下山村にオモテが分布している。『和名類聚抄』によれば、「門^{和名}加度、所以通出入也」とあるが、所によってはカドの意味するものが少しずつ違い、家の前の道

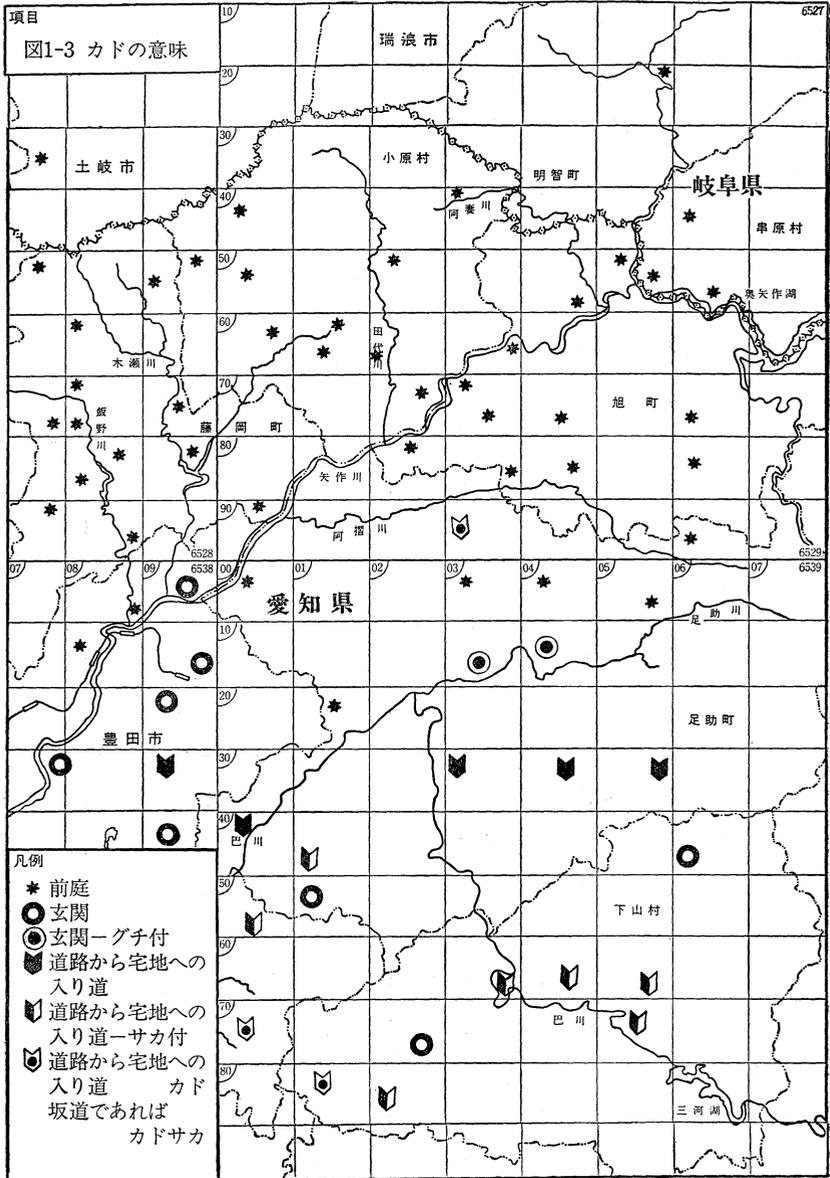
路であったり、その道路から宅地への入り道であったりする。また、調査地域の東に隣接する北設楽郡神田（かつて振草村）では宅地と屋敷墓を指していう。従って、ここに分布するカドが『和名類聚抄』でいう門の拡大解釈によるものなのか、また垣根で区切った敷地を指す垣内（かいと）が変化したものなのかわからない。オモテは裏に対する表の意からきているのであろうが、当該地域では家の裏の意としてセドが全域に分布していた。図1-1は二語形による単純な分布図であるが、図1-2、1-3を合わせることによって語の流れがわかる。図1-2はカドとオモテの使用語及び理解語の分布図である。これを見ると、使用語カドが分布している旭町に理解語としてオモテが分布しており、それはさらに矢作川以北にまでも分布していることがわかる。地点 6528・5919, 6528・7820, 6529・5525, 6529・7496, 6529・9028 の5地点ではカドが古く、オモテが新しい語形であるとの報告が得られた。図1-3はカドの意味を地図に表わしたもので、オモテ（前庭）が分布する矢作川以南にはカドが部分名称として使用されている地点がある。当該地域の農家のほとんどが道路より少し奥に家屋を建てており、そのため道路から宅地までの間に細い道を作っている。それを指してカド、または家屋が山の斜面に建てられておれば入り道は坂になっており、そのような所ではカドサカという。地域差はないが、玄関を指してカド、カドグチという地点もある。

以上、図1-1、1-2、1-3より考えるに、当該地域ではもともと前庭の意味としてのカドが分布していたが、南からオモテが侵入してきたことによって、豊田市、足助町、下山村にカドが部分名称として残ったのであろう。そして、カドが使用語、オモテが理解語として分布する旭町ではようやくオモテが伝播してきたところであり、現時点でカドが分布する藤岡町、小原村でも、矢作川が妨げとなっているものの、オモテの侵入は必至と考えられる。

225 西加茂郡・東加茂郡及びその周辺地域における語の伝播について





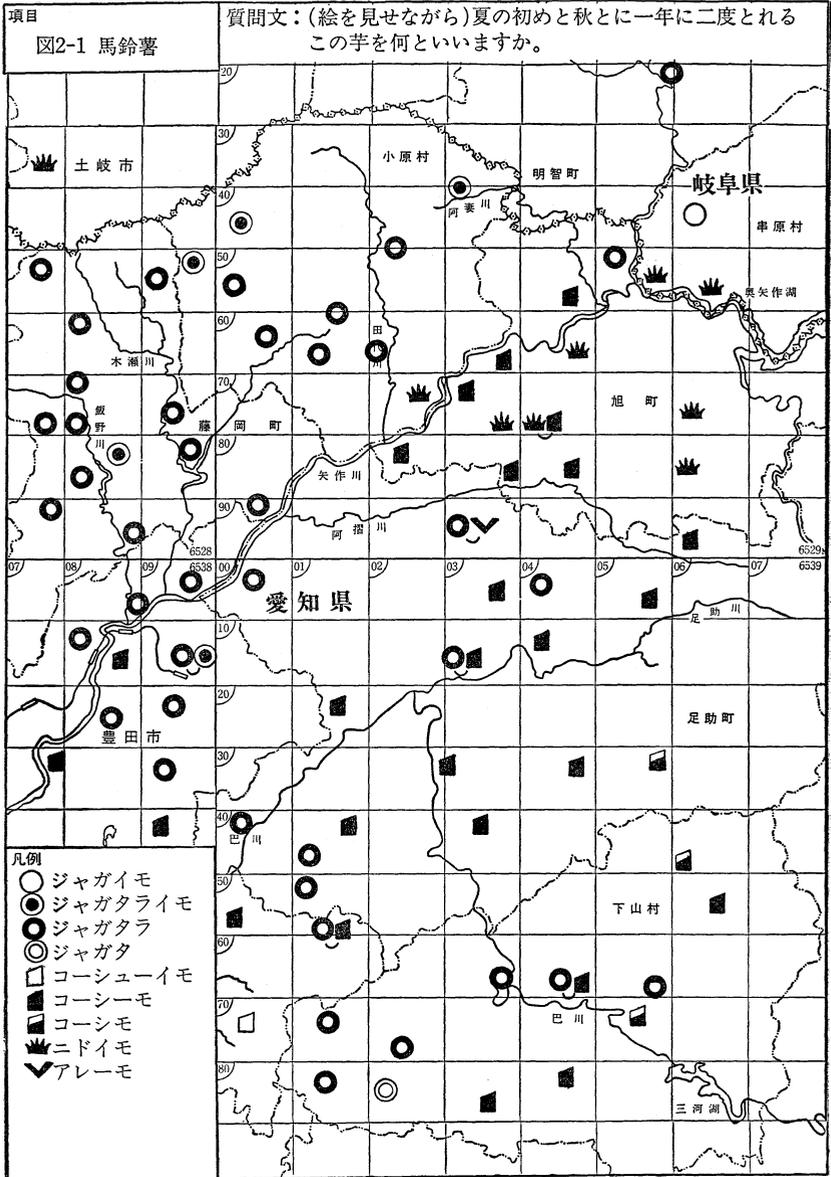


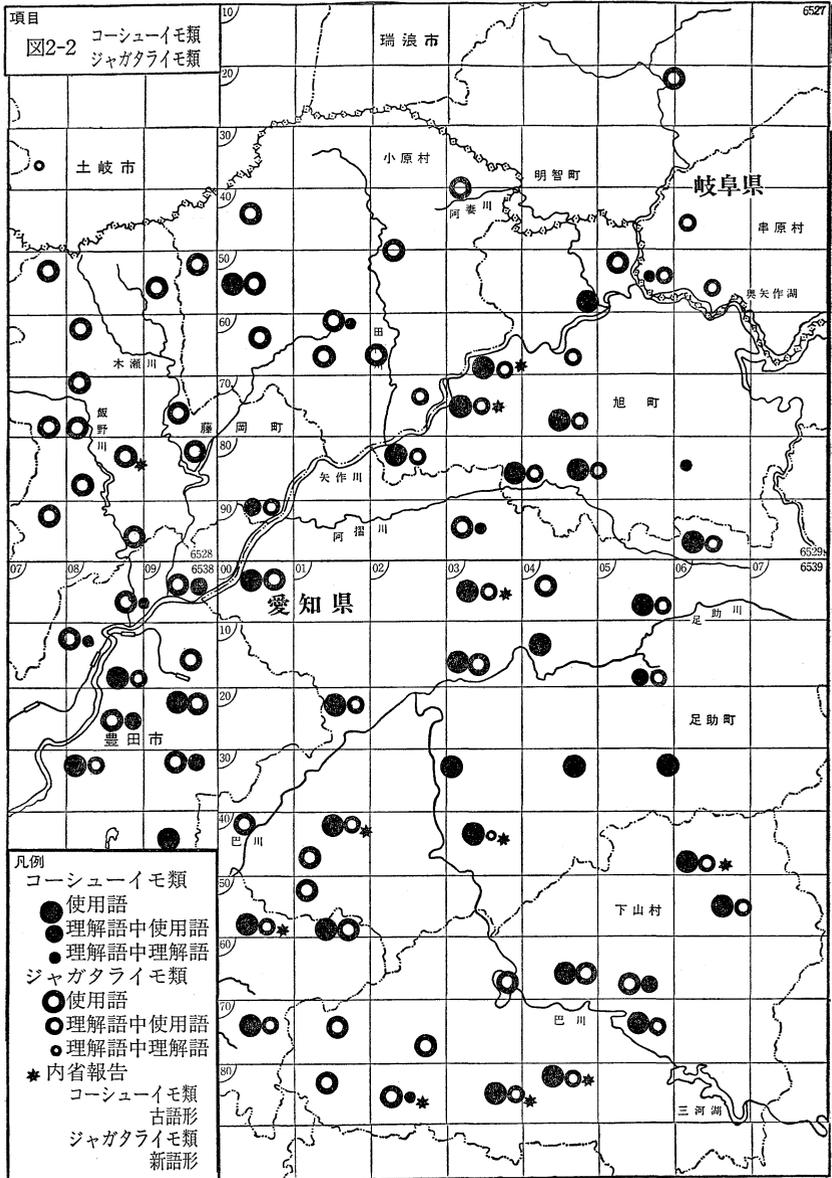
馬鈴薯（じゃがいも）

図2-1は絵を見せながら「夏の初めと秋とに一年に二度とれるこの芋を何といいますか。」という質問から得た使用語の分布図である。

矢作川以南一帯に分布するコーシーモは、足助町に1地点、下山村に2地点みられるコーンモとともに、コーシューイモの変種と考えるが、コーシーモがコーシューイモの訛りだとの報告は地点6539・5648のみである。また、コーシューイモとは「甲州芋」のことなのか、当該地域において「馬鈴薯」と甲州（山梨）の関わりは明らかでない。矢作川以北及び豊田市から足助町、下山村にかけてジャガタラが分布している。被調査者の多くは、ジャガタラが正しくはジャガタライモであること、そして、それが昔ジャワから日本に伝えられたことにより名付けられたものであり、現在の共通語形ジャガイモもとの語形であることを認識している。旭町を中心に分布しているニドイモについては、この土地ではかつては質問文通り、馬鈴薯を年に二回作っていたとの報告を得ているし、地点6529・6136、6529・7311では理解語としてニサクイモ（二作芋）が回答されている。このことからニドイモが収穫回数に関する「二度芋」のことであることは明らかである。分布図にはないが、ニドイモを理解語まで見ると、さらに旭町周辺の小原村、足助町にまで分布している。しかし、これら旭町を中心にみられるニドイモは、前述の「前庭」でのオモテの旭町への伝播の遅さからもわかるように、矢作川以南に分布するコーシーモよりも古い語形の残存と考えられる。図2-2はジャガタライモ、ジャガタラ、ジャガタをまとめたジャガタライモ類、コーシューイモ、コーシーモ、コーンモをまとめたコーシューイモ類それぞれの使用語及び理解語の分布図である。コーシューイモ類は理解語をみても矢作川以北にはあまりみられないが、ジャガタライモ類のそれは矢作川以南一帯に分布している。さらに、ジャガタライモ類とコーシューイモ類が重なる地域でコーシューイモ類が古語形、ジャガタライモ類が新語形との報告は地点6528・8845、6529・6348、6529・7311、

221 西加茂郡・東加茂郡及びその周辺地域における語の伝播について





6539・0366, 6539・4116, 6539・4338, 6539・4691, 6539・5084, 6539・8284, 6539・8397, 6539・8427 の11地点で得られたが、その逆の報告はなかった。中でも、地点 6528・8845, 6539・8284 では被調査者自身はジャガタライモ類を使用するが、先代がコーシューイモ類を使用していたと報告している。以上のことから、矢作川以南にコーシューイモ類が分布していたところへ、西からジャガタライモ類が侵入してきたと考えられる。

まぶしい

図3は質問文「天気の良い日に外に出ると太陽の光があまりきつくて、目を開けていられないような感じがします。この感じをどんなだといひますか。」から得た使用語の分布図である。

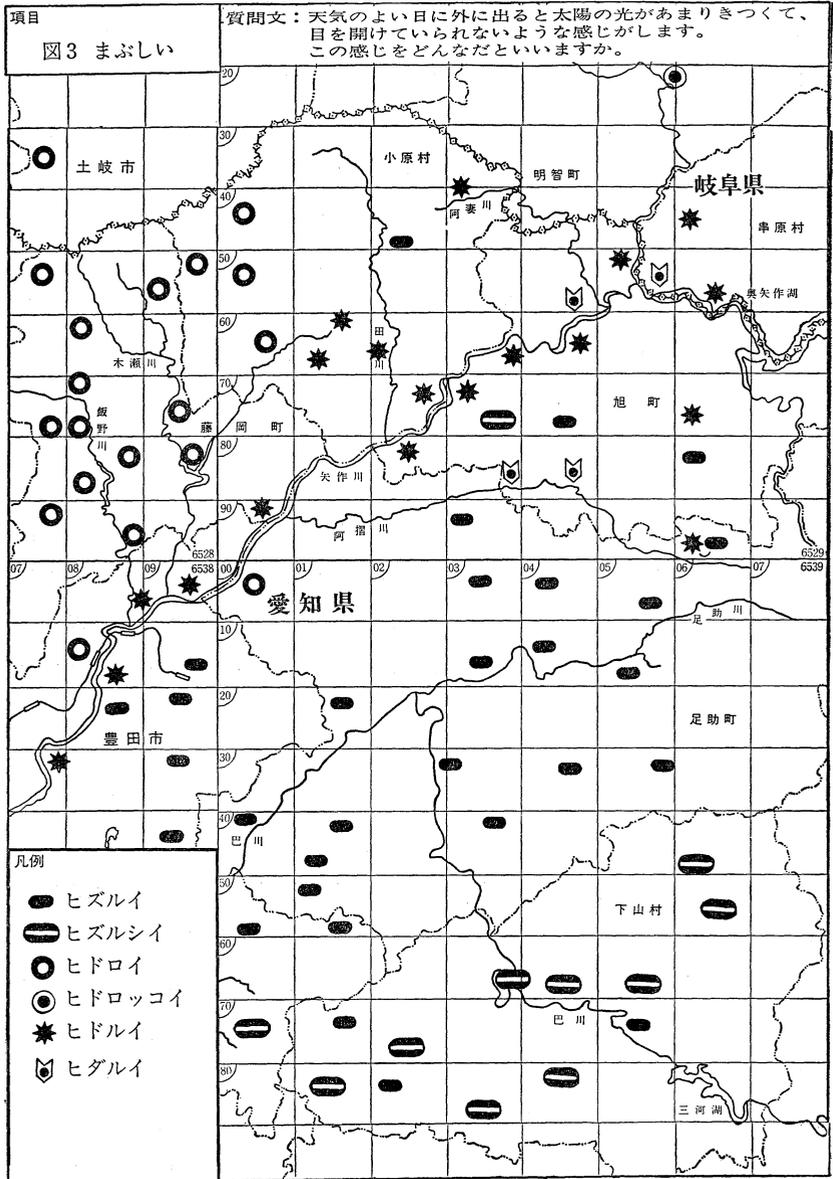
南から順に見てみると、ヒズルシイが下山村に、ヒズルイが豊田市、足助町に、ヒドロイが矢作川以北藤岡町、小原村に分布しており、さらにヒドルイが矢作川沿いに、ヒダルイが旭町に3地点、串原村に1地点みられる。『日本国語大辞典』によれば、ズルイには「悪賢い」の他、「しまりがない」の意があり、新潟県、長野県の一部では「動作がにぶい」の意で使われているという。さらに、調査地域より東に位置する北設楽郡で「仕事がズルイ」といえば「仕事が手早くできない」の意である。トロイやタルイにも「動作や反応がにぶい、しまりがない」の意がある。とすれば、当該地域にみられるヒズルイ、ヒドロイ、ヒダルイは同義語ズルイ、トロイ、タルイにヒ(日)がついた複合語と考えられようか。さて、下山村に分布するヒズルシイは『日本言語地図』1集第30, 31図「まぶしい」を見ると、調査地域より南の西三河一帯と伊豆半島にみられる語形である。これが、「日・いずる・らし」を語源とする語形なのか、「日・辛い」がもとの形なのか、またはそのヒズライと関東一帯に分布するマブシイの混交語なのか、諸説様々で今のところ明らかにはできないが、少なくとも当該地域の下山村以北において、旭町に1地点みられる以外は理解語にも全くみられ

ないことから、ヒズルイがヒズルシイの派生語と考えるよりも、ヒズルシイとは語源を異にし、足助町を中心にヒズルイが分布していたところへ岡崎から新たにヒズルシイが侵入してきたと考える。また、旭町、串原村にみられるヒダルイは地理的に考えても古語形の残存と考えられるが、それでは矢作川以北に分布するヒドロイは足助町を中心に分布するヒズルイよりも古いかとなると一概にいけない。なぜならば、まずヒドロイは東濃地方南端部から調査地域より西の尾張地区にかけて広く分布している語形だからである。さらに、矢作川沿いにみられるヒドルイはヒドロイとヒズルイの衝突によって派生した混交語と考えられる。従って、当該地域一帯にヒドロイが分布していたところへ南から新たにヒズルイが伝播してき、矢作川以南一帯に広がったものの、矢作川に妨げられて当川以北に侵入できなかったというよりは、当該地域一帯にヒズルイが分布していたところへ尾張地区から東濃地方にかけて分布するヒドロイが侵入してき、矢作川沿いに緩衝地帯を作り、ヒズルイとヒドロイの衝突により混交語ヒドルイを派生したと考える。このように、「まぶしい」は南からの勢力（ヒズルシイ）、ヒズルイの対立語形として西からの勢力（ヒドロイ）をともに持つ分布図である。

三. おわりに

本稿では調査地域南部に勢力語形を持つ分布図「前庭」、西部に勢力語形を持つ分布図「馬鈴薯（じゃがいも）」、二対立語形を持つ分布図「まぶしい」を取り上げたが、今回の調査項目の中で、地理的条件、理解語、被調査者の内省報告などから分布語形の勢衰について考察し得る語形は南部勢力語形16語形、西部勢力語形6語形、南部勢力語形と西部勢力語形の対立語形2組であった。さらに、南部に分布する語形2語形、西部に分布する語形1語形、北部に分布する語形3語形にそれぞれ勢力がみられたが、こ

217 西加茂郡・東加茂郡及びその周辺地域における語の伝播について



れらは共通語と同語形であるため除いた。なぜならば、現在の共通語と同語形の語形に関しては、もともとその地域に分布していたのか、標準語という意識のもとに広がった共通語なのか明らかにすることができなかったからである。これはちょうど被調査者の幼年期が、明治35年に国語調査委員会が設置され、日本語の標準語制定のための調査が始められるに従い、方言是正、標準語化への関心が高まりはじめた時期であることと無縁ではないだろう。

各勢力語形とも資料とするにはあまりにも少ないが、それでもやはり当該地域での岡崎、西三河の影響は強く、「前庭」のように南に分布する語形に勢力のある分布図が多い。そして、北部分布語形が南部分布語形を押えて侵入するには、北部のそれが共通語と同語形であるとかの、地理的要因とは別の方が無い限り起り難いのではないか。それに対して、西部分布語形は、南部分布語形との対立語形以外、「馬鈴薯（じゃがいも）」で西部分布語形ジャガタライモ類がコーシューイモ類と重なる地域では前者が新しい語形と認められたように、常に新語形の侵入という形で現われており、今後、当該地域において、尾張地区を含む西からの影響は次第に増大していくであろうと考える。

注

- (1) 信州中馬による馬糞は関東青梅地方から江戸へ、長野県伊那地方から三河地方への農民による物資輸送がはじまりである。三河山間部の馬糞を特に「三州馬」といい、信州から名古屋へはたばこ、麻苧、椀、絹、麻布、紙、薬種などが、帰り荷には魚類、綿、反物、塩、木綿などが運ばれた。
- (2) 「戦前、街へ買物に行くとするれば、どこだったか。」という意識調査に対する被調査者の回答はほぼ下記の通りであった。

被調査者の居住地	各町村の被調査者が指した「街」
足助町	足助町足助
旭町	足助町足助、瀬戸、豊田、名古屋

下山村巴川以北	足助町足助
〃 巴川以南	岡崎
藤岡町	瀬戸
小原村	瀬戸

参考文献

- 『愛知 歴史と文化』 1982 (講談社)
『愛知百科事典』 1976 (中日新聞本社)
『倭名類聚抄 元和三年古活字版二十巻本』 (勉誠社文庫)
『日本国語大辞典』 縮刷版 1979~1981 (小学館)
『全国方言辞典』 東條操 1951 (東京堂出版)
『分類方言辞典』 東條操 1954 (東京堂出版)
『愛知のことば』 永田友市 1978 (中日文化)
『豊橋地方の方言』 吉川利明・山口幸洋 1972 (豊橋文化協会)
『方言から見た東海道』 山口幸洋 1982 (秋山書店)
『東海のことば地図』 竹内俊男 1982 (六法出版社)
『日本語地図』 1~6集 国立国語研究所 1966~1974 (大蔵省印刷局)
『尾張と東濃の境界地域言語地図』 1982 (椋山女学園大学方言研究グループ)
『方言』 第六卷第八号「愛知県北設楽郡振草村語彙」瀬川清子 1936
『方言』 第六卷第十二号「愛知県農民衣食住語彙」井之口有一 1936